

ジャン・バニエの思想

浅野幸治

ジャン・バニエは、第一には霊性の指導者であり、数多くの黙想会の指導をしている——しかし同時に、知的障害をもった人とそうでない人とが共に生きる家「ラルシュ」の創始者でもあり、障害者⁽¹⁾福祉について独自の思想をもっている。この小文では、後者の側面に焦点を絞り、障害者福祉に関するバニエの思想（人間観）を簡単に紹介してみたい。

バニエの思想背景

言うまでもなく、バニエはキリスト教の人であり、キリスト教がバニエの思想の中心にある。しかしながら、バニエの思想には、その背景として、もう一つの、あまり知られていない構成要素がある——それはアリストテレス主義である。この点は、以下のような状況からも容易に推測できる。すなわち、バニエの師であるトマ神父は、ドミニコ会の司祭・神学者である。バニエもソールシュワルというドミニコ会の神学校で哲学と神学を学んだ。ドミニコ会とはトマス・アクィナス（一二二五年頃～一二七四年）がいた修道会で、トマス・アクィナスとはアリストテレスの哲学をキリスト教に導入した人で、以来ドミニコ会はトマス主義（アリストテレス主義）の伝統を受け継いでいる。最終的にバニエが書きあげた博士論文は「幸福——アリストテレス倫理学の原理と目的」というものであった。バニエがラルシュを始める前、一九六三年にトロントで大学教師として世に出たとき、バニエはアリストテレス学者だったわけである。したがってバニエの思想には、キリスト教とアリストテレス主義という二つの要素がある。キリスト教の思想（教え）に関しては読者もすでによくご存じだろうから、以下の紹介では、特にアリストテレス主義の要素を中心に述べていく。

バニエの二つの体験

哲学の話に入る前に、まずバニエの思想形成に決定的に影響したと思われる二つの出来事——バニエの体験——について述べることで話を始めたい。一つめは、一九四二年、バニエが十三歳のときの体験である。そのとき世は第二次世界大戦中であり、バニエはカナダにいた。バニエは、イギリスの海軍兵学校に入ろうと考えて、父親に相談に行った。父親は、「何をしたいのか、なぜそうなのか、よく話しなさい」と言ってバニエの考えに耳を傾けてくれ、バニエの言葉に対して「おまえを信頼するよ。もしそれがおまえのしたいことなら、それをしなければならない」と応えてくれた。つまり、人生の選択に関して父親がバニエを信頼してくれた。父親が信頼してくれたから、バニエも自分自身の直観力・判断力を信頼することができた。これは非常に重要なことである。自分の判断力を信頼することができるから、自分で自分の人生を選択することができる。反対に自分の判断力を信頼できなければ、他人の判断に従うしかないだろう。しかしそれでは、自分の人生が自分のものでなくなってしまう。バニエが一九六四年に哲学教師の職を捨てて、ラファエルとフィリップという二人の知的障害者と一緒に暮らしはじめることができたのは、自分の判断力を信頼することができたから、社会の常識という他人の判断に従わなくてすんだからである。

もう一つの体験は、一九六三年十二月にトマ神父を訪れたときの、知的障害をもった人たちとの出会いと、一九六四年初夏にパリの南にある施設で目にした光景である。トマ神父は、一九六三年秋から、パリの東北七〇キロほどのところにあるトローリー・ブルーユ村で知的障害者の施設「花咲き溪谷」の司祭になっていた。そのトマ神父から「新しい友だち」ができたから会いにこないかと誘われて、バニエは同年のクリスマス休暇にトマ神父を訪ねて、そこで初めて、知的障害をもった人たちと出会った。知的障害をもった人たちはひどく傷ついて、友情と愛情を求めている。翌一九六四年の初夏に、バニエは、パリの南にある知的障害者の施設を訪

れた。その施設は、巨大なコンクリートの壁に囲まれていて、建物はセメント・ブロックで出来ていた。そこでは、八十人の男性が仕事もなく寮生活をしていた。何をするかと言えば、彼らは一日中ぞろぞろと歩き回るだけだった——午後二時から四時までは強制的な昼寝の時間で、その後またぞろぞろと歩き回るのだった。それは一体どういう生活だろうか。コンクリートの壁で社会から隔離されていて、もちろん外出も許されない。寮の中で生活が管理されている。つまり、自分の生活が他人によって決定されていて、自分の自由がない——そういう生活であれば、もし仮に仕事があったとしても、それは強制労働以外の何ものでもないだろう。知的障害をもつ人たちはそのように惨めな状況に置かれていたけれども、にもかかわらず、バニエは、その人たちの中に神さまがおられるのを感じとった。それを理解するには、私たちはイザヤ書五三章にある主の僕の苦難と死という箇所を参照すべきだろう。そこには、次のように書いてある。

見るべき面影はなく
輝かしい風格も、好ましい容姿もない。
彼は軽蔑され、人々に見捨てられ
多くの痛みを負い、病を知っている。
彼はわたしたちに顔を隠し
わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。

哲学の話——アリストテレス以前

さてそれでは、次に少し哲学の話に入ろう。そもそも大昔に、古代ギリシアの哲学者、特に初期の哲学者たちは、私たちが住んでいる世界で見られる変化を説明しようとした。その際に出発点となった洞察は、変化の前と後とで同じであり続けるものがあるということである。もし変化の前後に共通する要素がないならば、あるものが無くなって、別のものが生まれるというだけであり、その二つのものの関係を説明することは、およそ望み得ないだろう。したがって、変化は一般的に次のような形式をとる。

あるものが、ある状態から別の状態に変化する。

そのようにして始まった探求から、原子論も生まれた。言うまでもなく、原子論とは、変わらないもの（原子）の離合集散によって様々な現象（変化）を説明しようとする考えである。しかしながら、アリストテレスは、原子論者ではなくて、ソクラテス、プラトンという別の思想系統に属す。ソクラテスは、ものが同じものであり続けるための条件——これを本質とか本性と呼ぶ——を探求した。それをプラトンは、実現すべき理想という方向に発展させた。結果的に、プラトンは、理想の社会を描くのに雄弁であったが、現実の世界の変化はあまりうまく説明できなかった。

アリストテレス主義——可能性の哲学

この思想系統に属しながらアリストテレスが変化を説明する仕方は、可能性の哲学と呼ぶことができる。それを形式的に言えば、次のようになる。

変わることができるものが、変わることができるものになる。

これは当たり前のことのように思われるかもしれないが、そうではない。例えば、砂糖は水に溶けることができる。石炭は、燃えて大きな熱量を発生することができる。これらのことは、そうした可能性をもたない物との対比において理解する必要がある。例えば、砂は水に溶けることができない。瓦は、燃えて大きな熱量を発生することができない。つまり、そうした可能性があるものとないものとの間には、大きな違いがあるということである。変化のこのような説明は、生命体に適用されたとき、特に説得的である。例えば、どんぐりを見てみよう。どんぐりは、わずか二センチほどの楕円形をした硬くて茶色いものである。しかし、その小さなどんぐりの内には、樫の大木になる可能性が宿っている。アーモンドや石ころも、同じような大きさと楕円形をしていて硬くて茶色いかもしれない。しかし、アーモンドや石

ころには、櫨の大木になる可能性はない。アーモンドはアーモンドの木になる可能性があるだけであるし、石ころにはそもそもそのように成長する可能性もない。つまり、現実の姿を目で見た限りでは、どんぐりもアーモンドも石ころも似たようなものであり、その本性は理解できない。それぞれのものの本性は、可能性に注目することによって理解される。

このような可能性への着目は、マタイによる福音書第五章にある有名な「幸い」の箇所にも見られる。これは、「……は幸いである」と述べられる一連の文章であるが、なかには分かりにくいものがある。例えば四節や七節である。

悲しむ人々は、幸いである、
その人たちは慰められる。（マタイ五章四節）
義に飢え渴く人々は、幸いである、
その人たちは満たされる。（マタイ五章七節）

どうして悲しむ人々が幸いなのか、どうして義に飢え渴く人々が幸いなのか、人を馬鹿にしたような話と思われよう。たしかに、いま目の前にある現実を見れば、悲しむ人も義に飢え渴く人も、惨め以外のなにものでもないだろう。その人たちがどうして幸いなのか。それは、可能性に注目することによって理解される。つまり、その人たちは、慰められ、満たされるという未来の可能性があるから幸いなのである。このように福音書も、現実を目をくらまされるのではなくて、未来の可能性に注目することによって人間を理解する。

櫨の大木になる可能性を内に宿しているどんぐりは、土壌や水、空気や温度や日光といった適切な環境が与えられるならば、発芽し生育し、やがて櫨の大木になる。それが自然な過程であり自然の秩序であると考えられる。つまり、可能性を宿しているものにとっては、その可能性を開花・実現させることが自然なことなのである。特に生命体の場合には、その可能性を開花・実現させることは、生命力の充実であり、それが幸福ということに他ならない。

アリストテレス主義——人間の幸福

自分がもっている可能性を実現させることが幸福だという、この自己実現という考え方は、現代では職業生活との関連でよく知られた考え方である。例えば、野球が上手な人にとっては、プロ野球選手になることが好ましく、プロ野球選手として活躍することが幸福なことであるという具合に考えられる。たとえプロになれなかった場合でも、野球選手として活躍できることはやはり幸福なことであろう。野球でなくても、なんらかの才能や能力がある人は、その才能や能力を生かすことが好ましく、人生の充実につながると考えられる。では人間には、どのような可能性があるのだろうか。アリストテレスは、人間の可能性（潜在力）を三つの次元に分けて考える。第一に、植物とも共有する能力がある——栄養摂取、成長、生殖の能力である。第二に、他の動物とも共有する能力がある——感覚、運動の能力である。第三に、人間に固有なものとして、理性能力がある。これらの能力を行使することはいずれも気持ちのよいことである。したがって、アリストテレスによれば、理想的に幸福な人間とは、健全な身体をもち、生活するに十分な経済力があり、家族に恵まれ、理性能力を行使して社会的にも成功している人ということになる。これは、おおむね現代社会でも常識的な幸福観である。

バニエも、基本線においては、このアリストテレス流の自己実現という考え方を踏襲する。つまり人間にとって、自らの可能性（能力）を実現することが幸福だということである。翻って、バニエが目撃した、知的障害をもつ人たちの状況は、どうだったろうか。知的障害をもつ人たちは、例えば、移動の自由を奪われていた。もちろん、身体が不自由ということもあっただろう。しかし、それ以上に自由を奪われていた——たとえ能力的に外出できても、外出が許されなかったのである。アリストテレスは人間の可能性をおおざっぱに挙げていたけれども、明らかに人間には、欲求する能力や選択する能力、学習する能力もある。もし「理解できない」という理由で選択する自由が与えられず、「理解できない」という理由で学習する機会が与えられなかったならば、人間はどうなるだろうか。生きる気力もわからない

し、将来に希望ももてないだろう。そのように、知的障害をもつ人たちは、様々な可能性を奪われていたのである。したがって、バニエがラファエルとフィリップと暮らしはじめて、最初にしたことは自由の回復であり能力の開発である。なにも高度な能力、特殊な能力を開発するということではない。普通に人間としての暮らしをするということである。それが友だちとして生きるということであり、具体的には一緒に料理をしたり食事をしたり、くつろいだり遊んだり、家の修理をしたり農作業をしたりということである。

愛する能力

おそらくここまでのところであれば、バニエの思想も、一般の障害者福祉の思想とあまり変わらない。つまり、障害者の人権を回復し、障害をもった人もできるだけ普通に人間らしく生きられるようにしようというわけである。しかし、それだけでは、二つの不足があるように思われる。第一に、身体的・理性的に有能な人は立派な人間であり、無能な人は劣った人間ということになるだろう。障害をもつ人、特に知的障害をもつ人は、たとえ人権が回復されたとしても、劣った人間（二級市民）に留まるだろう。第二に、知的障害をもつ人にも人権があるとしても、なぜ非障害者が障害者を支援する責務があるのかがよく分からない——非障害者は、障害者に障害を負わせた加害者ではないからである。つまり、なぜ赤の他人を助けなければならないのかがよく分からない。

既に述べたように、アリストテレス流の考えによれば、人間にとって、自らの可能性を実現することが幸福である。アリストテレスにとって、人間がもつ様々な可能性の中で最も重要な能力は理性能力である。それこそが人間にとって固有の能力であり、理性能力によって人間は真に人間らしくなるからである。現代社会でも、理性能力は重要視されている。しかしバニエは、この人間観に一つの重大な修正を加える。バニエは、理性能力を、愛する能力に置き換える。人間の可能性の中で最も重要な能力は、愛する能力だというわけである。したがって、愛する能力を発達

させて、現に愛し愛されている人が最も幸せだということになる。言うまでもなく、愛が大事だというのはキリスト教の思想である。神さまが愛の神さまだから、神の似姿としての人間にできる最高の可能性も愛する能力なのである。マタイによる福音書とルカによる福音書には、次のように書かれている。

あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。（マタイ五章四八節）

あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい。（ルカ六章三六節）

現代の競争文化と知的障害者

バニエは、現代社会を競争文化の社会と見る。そこでは、能力を伸ばし他人との競争に勝って、他人よりも大きな権力や称讃をえることが良いこととされる。そのような社会では、能力のない知的障害者は、押しのけられ、誰からも評価されない。しかし、知的障害をもった人たちは現代社会にとって非常に貴重な、価値ある存在であると、バニエは考える。知的障害をもった人たちは、愛する能力に優れているからである。すなわち、知的障害をもった人たちは、他人を信頼するという仕方であらう。なるほど、力のある人は、他人に色々なものを与えることができるだろう。しかし、役に立つことをなにもできない無力な人間は、他人を信頼して自分自身を差し出すのである。多くの人にとって恐らくより身近な例をあげよう。赤ん坊は親を信頼して泣き声をあげる。それに応えて、親は赤ん坊を優しく抱きかかえる。赤ん坊は安心して笑い顔になり、それを見て親も喜ぶ。これが信頼の関係、愛の関係である。力のない知的障害者が叫び声をあげ、目や身体全体で「助けて」と訴えるとき、非障害者は呼びかけられている——真の人間関係へと誘われている。その呼びかけに応えるならば、真の人間関係に入ることができる。真の人間関係とは、心の関係、お互いに相手の人がいてくれて嬉しいと感じるような関係である。そして、このような関係を体験すれば、このような関係の中で生きることこそが人生で最大の喜びであることが分かる。言い換えれば、人生の目的は、勝つことでは

なくて、人と共に生きること、その喜びを分かち合うことだと分かる。

バニエは、現代社会の価値観とラルシュの価値観との対立を強調する。現代社会の価値観とは、力のあること、勝つこと、成功することをよしとする見方である。他方、ラルシュの価値観とは、人と共に生きて、その喜びを分かち合うことにこそ人生の価値があるという見方である。ラルシュに来て働いた若い非障害者は、知的障害をもった人たちとの生活の中から、これまで知らなかったような喜びを体験し、ラルシュの価値観を学ぶ——そこでは、知的障害をもった人たちが先生である。その際に、社会の価値観から解放されることが重要である。というのは、社会の価値観（他人の判断）に囚われていては、別の生き方を選びとることができないからである。

最後に

以上、バニエの思想についてごく簡潔にまとめてみた。最後に、筆者はこの三月にバニエのいるラルシュ・トローリーを訪れる機会をえた。そこで、ラルシュの生活で筆者の心に特に留まった二つの点を付け加えることをお許しいただきたい。第一に、ラルシュでは一人一人の人——障害のある人もない人も——を大切にする。人生の価値はなにかを成し遂げることにあるのではなくて、むしろ人そのものに価値がある。したがって、人と共に生きて人を慈しみ思いやるとき、それぞれの人を生かそうとする。一人一人の人がそれぞれ自分の人生を送ることができるように、一人一人の人の必要性によく耳を傾けるのである。もちろん、知的障害をもった人たちは、自分の欲求や希望、思いを言葉でうまく表せない場合もある。したがって、言葉ではない身体表現に注意を払って思いを読みとることが重要である。第二に、食べること、一緒に食事をとる時間を大切にする。食べることは、生きるための単なる栄養補給、必要悪ではない。食べることは、人間にとって非常に基礎的なことであり、生の喜びと密接に結びついている。したがって、一緒に食べるということは、生の喜びを分かち合うこと、共に生きることの確認だからである。他にも

重要な特徴があるだろうけれども、いま筆者の心に特に留まっている点を二つだけ述べさせていただいた。バニエの思想の実践的帰結として参考になれば幸いである。

注

(1) ラルシュでは「障害者」とは言わない。「障害をもった人」とは言う。本稿では、「障害をもった人」の短縮形として「障害者」という表現を使うことがあることをお断りしておく。

(あさの・こうじ 豊田工業大学准教授)

(付記 本稿は、新教出版社『福音と世界』2009年9月号50～55頁で発表したものである。)